

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 2 日現在

機関番号：13401

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2014

課題番号：25770181

研究課題名(和文) 削除に課せられる同一性条件の理論的・実証的研究

研究課題名(英文) A Theoretical and Empirical Study of the Identity Conditions on Deletion

## 研究代表者

中村 太一 (Nakamura, Taichi)

福井大学・教育地域科学部・講師

研究者番号：00613275

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、生成文法理論の極小主義プログラムの枠組みで、削除操作に課せられるとされてきた統語的同一性条件について、理論的・実証的観点から批判的検討を行った。その結果、統語範疇間の同一性と形態統語論上の同一性の存在が理論的にも経験的にも疑わしいことを明らかにするとともに、統語範疇間の同一性は意味の同一性へと、また形態統語論上の同一性は「平行性」条件へと還元可能であることを示した。

研究成果の概要(英文)：Under the framework of the Minimalist Program, this research critically examined the syntactic identity conditions that previous studies have argued apply to ellipsis phenomena. It is demonstrated that among those conditions those of category and morphosyntactic identity are theoretically and empirically questionable. It is then pointed out that those two conditions are rather attributable to the requirements of semantic identity and parallelism.

研究分野：英語学

キーワード：英語の省略現象 統語的同一性

### 1. 研究開始当初の背景

削除現象は、十分な音声情報を欠いているにもかかわらず豊かな意味内容を持つという点で、アリストテレス以降受け入れられてきた「音と意味を結びつけるものとしての言語」の考えに基づく現代言語学にとって大変重要な言語現象である。生成文法においても、その初期段階から、言語機能がどのように設計されるべきかを明らかにすべく、削除操作に課せられる意味・音・統語的同一性条件の解明という形で集中的に研究されてきた(Fox (2000), Hankamer and Sag (1976), Merchant (2001, 2008, 2013), Rooth (1992), Ross (1969), Sag (1976) 等)。このように、削除現象は、言語機能の解明を目指すうえで大変重要な研究トピックである。

近年展開されている極小主義理論では、言語機能は、意味解釈部門への入力となる LF 表示と音声解釈部門への入力となる PF 表示を形成する演算体系であると考えられている。このような言語機能の設計図に基づけば、削除操作に課せられる統語的同一性は LF 表示にしかその適用が許されないはずである(Chomsky (2000) 等)。さらに、LF 表示は完全出力条件(Bare Output Condition)により意味部門が解釈できるもののみから構成されていなければならない、したがってLF 表示に課せられる同一性条件とは意味解釈部門によって動機付けられるものでなければならない(Chomsky (1995) 等)。

しかしながら、近年の削除現象の研究では、「統語的同一性」の厳密な定義への配慮が乏しく、これまでの統語的同一性の多くは破棄や捉え直しが行われなければならないが、そのような試みがそれほど多くないのが現状である。

### 2. 研究の目的

本研究は、上述の学術的背景の下、削除操作へ適用される統語表示の同一性として設定可能な形を明らかにし、先行研究で主張されてきた統語的同一性条件を批判的に検討し、証拠とされてきた言語事実について再検討することで、言語理論の深化と発展に寄与することを目的とする。

### 3. 研究の方法

本研究は、研究代表者が研究の全ての側面を統括し、基本的には単独で研究を遂行する。具体的には、先行研究における統語的同一性条件を、統語範疇間の同一性、形態統語論上の同一性、「平行性」条件の三種類に大別し、統語的同一性条件を意味解釈の側から動機づけられなければならないものに限定した際、上述の三種類の条件が、この規定から外れていないか、定式化可能な条件となっているか批判的に検討を行なう。それと並行して、当該の統語的同一性条件を支持する言語事実について、特に英語の動詞句削除、疑似空所化、間接疑問縮約を主要な言語現象として、コー

パスやインフォーマントから得られた新たな言語事実に基づき検討する。これら作業を通して、当該の統語的同一性条件が妥当なものであるか、相互に相乗効果が得られるよう留意し、理論的・経験的に検討する。

### 4. 研究成果

(1) 統語範疇間の同一性を主張する最近の研究である Tanaka (2011) を取り上げ、新たな経験的証拠に基づき、統語範疇ではなく、それと密接に結びつくが一致はしない意味タイプの同一性から捉え直す必要性を指摘した。統語範疇間の同一性については、例えば、(i) のように、動詞句削除の先行詞として、動詞句をその内部に持つとされる *Ing* 動名詞句は可能であるが、(ii) のような動詞句を内包しない派生名詞句は不可能であることが指摘され、その存在が主張されてきた。

- (i) I remember shooting the scene, although I didn't want to <sheet the scene>.
- (ii) \*I remember the/my destruction of the document, although I didn't want to <destroy the document>.

しかし、(iii) に示すように、派生名詞句を先行詞として動詞句削除が可能な事例が先行研究で指摘されているばかりか、(iv) に示すように、動詞句削除に限らず間接疑問縮約文でも派生名詞相当句が先行詞となることを *The Corpus of Contemporary American English* (以下 COCA) を用いたコーパス調査から明らかとした。

- (iii) This letter deserves a response, but before you do <respond>, ...
- (iv) But killing was wrong, no matter by whom <anyone was killed>.

これら証拠は、統語範疇間の同一性に基づく削除分析では捉えられない。さらに、これら新たな言語事実については、動名詞句や派生名詞句の意味タイプに関する Vendler (1967) 等の考察 (v) に基づき、当該名詞句が出来事を表すのか命題を表すのかの違いに応じて、削除の先行詞としての適格性が決まる可能性があることを、インフォーマントから提供された新たな言語資料も用いながら、指摘した。

- (v) a. The collapse of the Germans is gradual. (出来事)
- b. The collapse of the Germans is unlikely. (命題)

この成果は、論文として発表した。

(2) 形態統語論上の同一性を主張する最近の研究である Merchant (2008, 2013) を取り上げ、当該条件を破棄すべき経験的根拠を、コーパスやインフォーマントから提供された新たな言語事実に基づき示した。例えば、動詞句削除は、(i) に示すように、先行詞との間で態の不一致を許すが、疑似空所化は、(ii) に示すように、態の不一致を許さない。

- (i) The system can be used by anyone who wants to ~~use it~~.
- (ii) \*Roses were brought by some, and others did ~~brought~~ lilies.

この対比は、態の交替が真値条件に影響を及ぼさないという前提の下で、(iii) の構造に基づき、形態統語論上の同一性を仮定し説明された。

- (iii) a. [<sub>TP</sub> DP1 T [<sub>VoiceP</sub> Voice<sub>[+Active]</sub> [<sub>VP</sub> V [<sub>VP</sub> V DP2]]]]
- b. [<sub>TP</sub> DP1 T [<sub>VoiceP</sub> Voice<sub>[-Active]</sub> [<sub>VP</sub> V [<sub>VP</sub> V t<sub>DP1</sub>]]]]

具体的には、疑似空所化の削除領域は、態の情報を言語化する機能範疇 Voice を含む VoiceP であるのに対し、動詞句削除は当該機能範疇を含まない領域である VP を削除領域とすると考えることで、態の不一致という形態統語論上の非同源性の影響を疑似空所化は受けるが、動詞句削除は受けないものとして説明された。しかし、(iv) のように、昨日範疇 Voice と密接に関わる受身の be 動詞を削除領域に含んだ例や、(v) のような間接疑問縮約の例までもが態の不一致を許す事実が COCA に基づくコーパス調査から得られた。

- (iv) “Do I have to talk to these people?” “They will want to ~~be talked to by you~~,” Scarborough said.
- (v) Not so much whether to teach the bible in public schools, but how? and by whom ~~the Bible should be taught~~?

さらに、(vi) に示すように、動詞句削除が態の情報を含む領域に適用されていると考えるべきであり、さらにその領域と対応する先行詞との間で態の不一致が起こっている場合であっても、態の不一致の影響を受けず容認可能な例が存在することを、インフォーマントから提供された資料に基づき指摘した。

- (vi) A: When John had to praise a student, he didn't want to Voice<sub>[+Active]</sub> ~~praise a student~~.
- B: ?When John had to be scolded by a dean, he didn't ~~want to be Voice<sub>[-Active]</sub> scolded by a~~

dean>>, either.

これら証拠は、形態統語論上の同一性に基づく削除分析では捉えられない。

さらに、これら新たな言語事実が、Kertz (2010) で形態統語論上の同一性の代案として提案された、主語焦点化と助動詞焦点化という情報構造上の特徴に基づく分析を支持するものであることも明らかにした。加えて、形態統語論上の不一致の対象として項構造の不一致までデータを広げた際にも、同種の情報構造上の特徴が見て取れることも示し、Kertz の分析の一般性も明らかとした。これら成果の全てまた一部は、論文、と発表、として発表した。

(3) 「平行性」条件については、意味解釈の側から動機づけられる条件であり、定式化可能な統語的同一性条件であることを、Fiengo and May (1994), Fox (2000), Hartman (2011), Rooth (1992) 等の先行研究を通して再確認した上で、この「平行性」条件を用いて形態統語論上の同一性の還元を試みた。具体的には、上述の Kertz (2010) の情報構造に基づく分析を、Chomsky (2000) 等のフェーズ理論の枠組みの中で、情報構造に関わる素性と移動により当該素性を認可する仕組みを仮定し、統語派生上で移動により形成される表示間の平行性で捉えることを試みた。この成果は、論文と発表、として発表した。

(4) 意味解釈から動機づけられない統語的同一性条件を支持する根拠が、統語範疇間の同一性については希薄なこと、また形態統語論上の同一性については意味解釈から動機づけられる「平行性」条件に還元可能なことが明らかとなった。今後の課題は、これら研究成果が持つ理論的・経験的帰結についてさらに追求することである。

#### 参考文献

- Chomsky, Noam (1995) *The Minimalist Program*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Chomsky, Noam (2000) “Minimalist Inquiries: The Framework,” *Step by Step*, ed., by Roger Martin, David Michaels and Juan Uriagereka, 89-155, MIT Press, Cambridge, MA.
- Davies, Mark (2008-) *The Corpus of Contemporary American English: 450 Million Words, 1990-Present*, Available online at <http://corpus.byu.edu/coca/>.
- Fiengo, Robert and Robert May (1994) *Indices and Identity*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Fox, Danny (2000) *Economy and Semantic Interpretation*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Hankamer, Jorge and Ivan Sag (1976) “Deep

- and Surface Anaphora,” *Linguistic Inquiry* 7, 279-326.
- Hartman, Jeremy (2011) “The Semantic Uniformity of Traces: Evidence from Ellipsis Parallelism,” *Linguistic Inquiry* 42, 367-388.
- Kertz, Laura (2010) *Ellipsis Reconsidered*, Doctoral dissertation, University of California, San Diego.
- Merchant, Jason (2001) *The Syntax of Silence*, Oxford University Press, Oxford.
- Merchant, Jason (2008) “An Asymmetry in Voice Mismatches in VP-Ellipsis and Pseudogapping,” *Linguistic Inquiry* 39, 169-179.
- Merchant, Jason (2013) “Voice and Ellipsis,” *Linguistic Inquiry* 44, 77-108.
- Rooth, Mats (1992) “Ellipsis Redundancy and Reduction Redundancy,” *Proceedings of the Stuttgart Workshop*, ed by Steve Berman and Arid Hestvik, University of Stuttgart, Stuttgart..
- Ross, John Robert (1969) “Guess Who?,” *CLS* 5, 252-286.
- Sag, Ivan (1976) *Deletion and Logical Form*, Doctoral dissertation, MIT.
- Tanaka, Hidekazu (2011) “Syntactic Identity and Ellipsis,” *The Linguistic Review* 28, 79-110.
- Vendler, Zeno (1967) *Linguistics in Philosophy*, Cornell University Press, New York.

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 4 件)

Sugimoto, Kenji, Taichi Nakamura, “An Argument Structure Alternation of Psych Verbs under VP-Deletion”, *JELS*, 査読無、32号、2015、132-138

Maeda, Masako, Taichi Nakamura, “VP-Deletion, Parallelism, and the Role of Aux: A Phase-Theoretic Approach”, *JELS*, 査読無、32号、2015、297-302

Nakamura, Taichi “Semantic Identity and Deletion”, *English Linguistics*, 査読有、30号、2013、643-658

Nakamura, Taichi “Voice Mismatches in Sloppy VP Ellipsis”, *Linguistic Inquiry*, 査読有、44号、2013、519-528、DOI: 10.1162/ling\_a\_00137

[学会発表](計 4 件)

梶本顕士, 中村太一, VP 削除からみた心理動詞の項交替、日本英語学会第 32 回大会、2014 年 11 月 8 日、学習院大学

中村太一, 省略に課せられる同一性条件から考える統語と意味のインターフェイス、日本英文学会第 86 回大会シンポジウム 講師、2014 年 5 月 24 日、北海道大学札幌キャンパス高等教育推進機構

前田雅子, 中村太一, VP-Deletion, Parallelism, and the Role of Aux: A Phase-Theoretic Approach, The English Society of Japan 7th International Spring Forum, 2014 年 4 月 20 日、Doshisha University

前田雅子, 中村太一, 動詞句削除の vP 領域における VP 話題化移動分析、日本英文学会九州支部第 66 回大会、2013 年 10 月 27 日、鹿児島国際大学

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

中村 太一 (NAKAMURA, Taichi)

福井大学・教育地域科学部・教育学研究科・講師

研究者番号：00613275